

### 第三〇回大会の光と影

佐藤 勉

個性的で特殊のないし例外的な事柄が、まさにそうであるが故に普遍的でないし一般的な性質を有しているとす「中野講演」に勇気づけられるとしても、ムラ研究に没頭しえない者の独断と偏見に満ちた印象しか残っていないのには、われながら驚いた。

三〇周年記念大会の意義が「過去の輝かしい歴史を確認すると共に、古い皮袋に新しい酒を盛り込みたい」（柿崎挨拶）にあることを知らなかった私が、何年ぶりに村研大会を傍聴して感知しえたのは、いささか大げさにいえば、社会学者に自覚されざる社会学の危機の深化であった。卒直にいえば、ムラ研究のパラダイム転換が社会的現実の側から要

請されている今日、その企てを真摯に追求しないとすれば、それはわれわれ研究者にとって一種の犯罪といふべきなのである。そしておそらく社会学者にとってのそうしたパラダイム転換は、現代社会学全般に対する反省的考察とは無縁ではありえない。経済学者がそれまでの経済学的研究の限界を述べ（高山報告、内山発言）歴史学者がいわゆる歴史的研究の枠を突破して文字通り、現状分析そのものを圧倒的に厚みのある実証に基づいて開陳している（安孫子報告）とき、わが国の社会学を代表すると私には思われる社会学者の村研の有力メンバーからは、総花的な見解や単発的な意見しか聞かれなかったのは、はなはだ残念であった。畏敬とあこがれにも似た気持で参加した私の心は一遍に冷えてしまったといわざるをえない。

村研は、もとより、経済学、歴史学をはじめさまざまな立場の研究者から成り立っているのだから、社会学にこだわって社会学の危機などについて述べるのはあまりにも例外的な印象であり、ルール違反といふべきかもしれない。しかし、ムラが亡びつつあるのに村研の懇親会があれほど盛会なのは変な話だが、村研の中でも、ムラの現状分析に誰れよりもより強く指向した社会学者の影が薄くなるのも、社会学者のはしくれの一人としてたまらなく淋しい思いがする。もっとも、日本農業の危機的状况の中で農民自身が新しい農業を模索しつつあり、そこに日本の農業の夜明けが確認できる（高山報告）のと同様に、こうした社会学の混乱状況の中で、どこかで若い社会学者がその人生をかけたモノグラフをまとめているのかもしれないし、ムラ研究の新しいパラダイムの構想をひそかに深めているのかもしれない。

以上の一般的な印象と合わせて、三〇周年記念大会のプランのせいか第一世代の方々の存在感がいやというほど表われていたように思われる。過去の栄光を確かめる見込みなどは完全に実現されたといつてよい。数ヶ月の時間が経過した現在、「記念講演会」での竹内、中野、綿谷の三氏の勇姿は、今なお私の目に焼きついていて、それぞれの威勢のいい声は、いまでも私の耳底で鳴りひびいている。なかでも竹内先生の声いろや眼のいろには何かしら異常な若々しさが感じられた。これほど元気のいい創業者の下では、ここでも世代交代が大変だという思いがした。中野講演も、かなり刺激的な内容で、ある意味では挑戦的でさえあった。通常の社会学のアプローチに対する痛烈なアイロニーさえ感じられたといえるだろう。個別的、具体的なものの中に一般的なものを探究する手がかりを求めるのは、まさにそうだというほかはないが、何が故に個別の現象がそうした形態をとっているのかに関する分析もまた必要とされるであろう。個人史から社会分析へではなく、社会理論による個人史の分析の方向性が不可欠だと思われるのだが……。しかし氏自身の提供されるデータは、そうした懸念を一掃しているといつてよい。綿谷講演を聞いていて、私は不思議なことにユルゲン・ハーバースの社会理論を思い出していた。ハーバースは、市場経済の貫徹しているシステム総合と、それに対抗している生活世界の社会統合の二本立てで社会を分析しようとしているからである。市場経済の原理とは行動原則を異にするムラの原理がそもそも今日ありうるのかどうか現実には問題なのだ（高山報告）が、ムラに生きている人々の行動原則にまで立ち入ってまで、経済的メカニズムを探究する姿勢として受け取れば好感がもてる。

第一世代の三氏の「記念講演」および十七日午前の課題報告からはいろいろ教えられたばかりでなく、われわれ後行する世代の不勉強、とくに社会学者の怠慢を責められているような気がしてならなかった。安孫子報告は内容が豊かで、時間の制約の故に、もっとも聞きたかった戦前期については十分な説明がなかったのは惜まれる。だが、おそらく理論的立場の違う人であれ、氏自身の枠組からの近代村落のエッセンスについての明示的な了解を得たであろう。欲を言えば、小農社会としてムラをみるという本質規定にとどまらず、私としては現代日本における小農社会がいかなる存在形態をとっており、そこで繰りひろげられている農民生活がいかなる内容のものなのかについての理論的説明を聞きたかった。しかし、氏からいわせれば、それこそ社会学のテーマということになるであろう。安孫子報告に接続しうる社会学のアプローチの具体化が切望されるゆえんである。長年にわたって一つの対象地を分析している点でも理論と実証との着実な連関の点でも、そこに生きる人間の声に耳をもつ点でも中野発言をまつまでもなく、安孫子報告は単なる社会学的研究というよりも、今日の社会学者が学びとらなければならぬ要素をふんだんに有しているというべきだろう。

社会学に対する私の反省の気持は、次の高山報告とそれに関する内山発言とみに高まった。

高山報告は、戦前の日本資本主義の解体、変化という認識に立って、「戦後日本農業の経済的枠組」を特定しようとする。端的にいえば、戦後においては国家行政レベルの非経済的な原則が、農業経済を貫徹しているという。稲作中心主義の転換をせまったり、農産物の過度の自由化

の問題が論じられたり、農業経済のあり方をめぐるカウツキー・ルダビッチ論争に言及されたりして、結局のところ、日本農業の危機的状況の中で独立的、自立的な農業が不可能ではないといわれたように思う。高山氏にとっても市場経済の荒波の中で存立しうる農業のあり方を現実的に考えることが根源的なテーマなのである。小商品生産者という本質規定にとどまらず、国家レベルの政治の状況を考え、そうした構造の下で生きている農民生活の現実的形態について想いをさせる氏の姿勢もさることながら、現在の農業の危機を考えるためには、これまでの経済学のパラダイムでは不十分だと断言され、生態系の再生産メカニズムとの関連で農業を捉える視角を強調されたのは、会場の多くの人々の共感をさそったと思われる。それに関連して内山政昭氏がほ次のような主旨の発言をなされたのは注目されてよい。「現代社会の危機は有史以来最大のものだ。そこで現代とは何ぞやをじっくり考える必要がある。そのためには、実証的研究を十年ぐらい休んで新しいパラダイムの構築に専念したらいい。なによりも、経済的側面ばかりではなく、そこで生きている人間を捉えきらなければならない。その点で生活史からのムラ研究の企ては面白いが、本当に整えなければならないのは生きている人間の生まのいぶき、そのイッヒハイトないしレーベンディヒヒカイトなのだ。自殺したいほど悩んでいる農村青年に対して、国家独占資本主義が悪いといっても不十分きわまりないじゃないか。」山内発言を的確に要約しえたつもりはないが、少くとも私にとってはこの爆弾質問は、現代社会科学の根幹にかかっていると思う。ただし高山報告も、内山発言も、いわゆる構造的アプローチを否定しているのでは勿論ないだろう。それは、

これまでの分解論の問題ともつながっている。分解論はその本質規定の水準にのみ固執することなく、分解状況下でそれぞれの農民にとって現実に考えられる生産と生活の可能性を明らかにし、さらにそうした客観的可能性に対する農民の主観的な判断の世界へふみ込む必要がある。いってみれば、農民の主体的、主観的な世界を捉えうる構造的アプローチが要請されているのだと思う。

いずれにせよ、自然の生命活動の一環としての生産につながりうる農業生産組織の現実的形態が、この現代社会でいかなる形で可能とされているのかを見きわめなければ、高山・内山両氏の問題提起に答えられないであろう。

残る三人の報告者もそれぞれ興味はもたれたが、整理能力の抜群という点では意見報告が印象に残った。連帯概念の多用は気になったけれども、管理社会化の進行しているプロセスにおいて農民の新たな連帯がいかにして可能なりやが問題だといわれれば、まことにそうだというほかはない。だが、整然とした分析は、実はそれに見合った実証の集積と、それを把握しうる鋭い分析枠組によって支えられなければなんとも空しいといわざるをえない。経済学者が自らのアプローチの限界をのべ、そのパラダイム革新を訴え、歴史学者が「社会学本来の研究」にまで手のばしつつあるとき、われわれ社会学者だけが、その方法も対象も茫漠としているというただそれだけの根拠によって、いせんとして理論なき実証に専念したり、実証と無関係な空想的な見解にふけったりし、そのパラダイム革新に無関係でいられるのだろうか。